

天理教はアヘン

— 騎西一夫「天理教本部」、芹沢光治良「鴉片(あへん)」を読む —

『人間の運命』『教祖様』等の作者として知られる芹沢光治良は、昭和5年、総合雑誌『改造』の懸賞創作に応募した「ブルジョア」が一等入選したことで、小説家の道を歩むこととなります。「自伝的小説」である『人間の運命』では、「自分の前に、天から鎖がおりて来たようなものだ。その鎖を握れば、自分は思いがけなく小説家の世界に引きあげられるかも知れない」とその時の気持ちを表現しています。

『改造』はこのころ、毎年懸賞創作の募集を行っていたようで、翌6年には、騎西一夫作「天理教本部」という戯曲が当選します。この騎西というのはペンネームで本名を松本一郎といい、沼津分教会の後継者として天理外語のロシア語科を卒業していました。一郎の父松本喜一は明治42年から沼津の会長となりましたが、大正15年に病死します。息子の一郎はまだ小さかったので、大きくなるまでのつなぎということで、沼津の上級、岳東の役員だった芹沢常晴が出張担任として会長を継ぎます。この常晴は芹沢光治良の実父で、そんな関係からか一郎と光治良は接触があったようで、『人間の運命』のなかに「天理教本部」(『人間の運命』の中では「天理教」という題名になっている)が書かれる前後の様子が記されています。

また、昭和7年には光治良が『改造』4月特別号に「鴉片」という題で、天理教をテーマとした小説を載せています。これは翌年、改造社より出版された短編集『明日を逐うて』の中に収録されたとき、「信者」という題に変更されました。光治良は『人間の運命』の中でも、この小説を「信者」という題で語っているので、『改造』に載った時には、「鴉片」であったことはあまり知られていないように感じます。

今回は、「天理教本部」、「鴉片」の内容について考えてみたいと思います。

一部のマルクス主義者は宗教に対して否定的な立場をとることがある。実際、ロシア革命以降、ソ連やアルバニア、中華人民共和国などの共産主義国家において、政策として宗教が弾圧され、聖職者が殺害されたり教会が破壊された。／ その根拠としては、カール・マルクスが、宗教を阿片になぞらえたことが挙げられることがある。マルクスの『ヘーゲル法哲学批判序論』(1843年)に「宗教は悩める輩のため息、心なき世の情であり、またそれは魂なき場の魂である。宗教は民衆の阿片である」とあるが、この文章に先立ち、ドイツの詩人でマルクスの親友でもあるハイネの1840年の著作『ルートヴィヒ・ベルネ回想録』第4章に「苦しむ人々のため苦い盃に、甘く眠りを誘う数滴、つまり精神の阿片を、愛と希望と信頼の数滴を注ぐ宗教万歳」という文章がある。またそのハイネに先立ちノヴァーリスの断章集『花粉』(1798年)に「彼らが宗教と呼ぶものは、ただ阿片のように、心を搔き立て、気を鎮め、弱さからくる痛みを和らげるよう作用するのみである」との文章がある。／ この阿片については『ヘーゲル法哲学批判序論』に痛み止めである旨の記述もあり、当時の緩和医療での疼痛などの痛み止めとして使用される医薬品の意であり、「麻薬」を強調したものではなかった。／ マルクスが宗教を阿片になぞらえた1840年代当時、阿片を違法薬物として見る見方は一般的ではない(例として、反ドラッグ法の制定は1875年である)。マルクスは宗教を批判もしたが、それは支配層の支配の維持に宗教が利用されているという指摘であり、宗教が「痛み止め」として民衆の精神に与える効用は部分的に肯定している。阿片になぞらえたことをもってマルクスが宗教を完全否定したと解釈するのは後の時代の歪曲である。(『ウィキペディア(Wikipedia)』「反宗教主義」より)

光治良の父が天理教に入信し、全財産を天理教に捧げ、村を出たとき、光治良一人祖父母の家に残されました。

芹沢光治良（本名・光治良）は、明治29年(1896) 5月4日、静岡県駿東郡楊原(やなぎはら)村我入道一番地（現在、沼津市我入道）に、常蔵（後、改名して常晴）、はるの次男として生まれた。我入道は、伊豆の天城峠から北へ向かって流れ出した狩野川が、沼津を抜けて駿河湾に注ぐ、河口の左岸にある。昔、竜の口の難を逃れた日蓮上人が、漁船に隠れてここに流れ着き、こここそ我が入る道であると言って上陸したところから付けられた名前だという。西南に海、北方に雄大な富士を望む景勝の地だが、我入道は他地域からは孤立した、百戸ほどの、まことに貧しい漁村だった。芹沢家は網元で、部落の中では裕福な階級に属したが、村人たちを救わなくてはという青年らしい正義感も手伝ったのだろう、父常晴は天理教に入信し、自宅を布教所にしていた。祖父はそれを嫌い、警察も目を光らせたが、常晴の信仰はかえって強まった。明治33年、全財産を天理教に捧げ、長男真一、三男亀太郎を連れて村を出た。光治良だけがどういう訳か、隠居所に住む祖父母の元に残された。光治良は、祖父母と、そして祖父母の世話をしながら漁業に従う叔父夫婦に育てられた。（『新潮日本文学アルバム芹沢光治良』P2.1995.新潮社）

「天理教本部」が発表された時、沼津分教会会長は、光治良の実父、芹沢常晴でした。

支教会昇格 明治41年11月27日天理教一派独立に上る教会制度改正の時、すでに小石川、嶽南、楊原、水沢、南葛飾、元吉原等が教会となっており、これらを部内として支教会に昇格出願する事となった。／ この時心ない一部の人の根も葉もない中傷による事情が発生し、大岳会長は教祖の教えに己れの因縁を悟り、自ら職を退き、後任者**松本喜一**をもって明治42年2月28日付許しをいただき支教会に昇格した。この大きな事情により地元の役員及び信者達の中には、尊い天理教の中で人を陥れる不正の人とは、この先共に出来ない信仰の道を離れる人が多くいた。 —中略—

分教会昇格 教祖40年祭の倍加運動により、部内教会31ヵ所となり、大正14年11月28日分教会に昇格した。翌15年4月22日松本会長は突然の病で52歳で出直した。連合教会の事情により、後任会長には嶽東より**芹沢常晴**をもって出張担任とし、大正15年5月29日5代会長に就任した。（『改訂天理教事典.教会史編』P513.沼津大教会項.1989）

『改造』—総合雑誌。改造社から1919年（大正8）4月、山本実彦(さねひこ)が創刊。大正デモクラシーの思潮を背景として生まれた社会問題や社会主義思想に関する論文を掲載し、河上肇(はじめ)、櫛田(くしだ)民蔵、山川均(ひとし)、大森義太郎(よしたろう)らのマルクス学者を執筆者として登場させ、社会主義に鋭い関心を示した。第一次世界大戦後の不況、関東大震災による混乱、世界恐慌、慢性的失業、軍国主義日本の満州侵略という事態に対して、マルクス主義の立場からの論文は、当時の多くの若者をとらえた。創作欄も充実しており、志賀直哉(なおや)『暗夜行路』、芥川龍之介(あくたがわりゆうのすけ)『河童(かっぱ)』、堀辰雄『風立ちぬ』など、近代の日本文学史に残る名作を掲載した。評論家宮本顕治、小林秀雄、作家**芹沢光治良**(せりざわこうじろう)、保高(やすたか)徳蔵らは、いずれも『改造』懸賞評論・懸賞小説が生んだ人々である。またバートランド・ラッセルの論文を載せたり、アインシュタインを日本に招待して、海外の新思想の紹介に努めた。／ しかし、満州事変から太平洋戦争への過程のなかで、編集は後退。戦争下の1942年（昭和17）8～9月号の細川嘉六(かろく)の論文「世界史の動向と日本」は、情報局の事前の検閲は通過したのに、陸軍報道部に摘発されて発禁となり、この事件を機として編集者や執筆者が神奈川県特高に検挙され「横浜事件」に発展した。44年6月に改造社は軍部によって解散させられた。敗戦後再刊されたが、55年（昭和30）1月、編集部全員首切りをめぐる労働争議が起こり、55年2月号で廃刊になった。（日本大百科全書(ニッポニカ)小学館より）

「ブルジョア」掲載誌面と「編集だより」の評

「編集だより」では、創作欄の充実ぶりを編集者が自画自賛しています。

◆本誌の創作欄は体観だ。懸賞入選作を初め廣津、小林、金子、吉田の諸氏いづれも百枚を超ゆる大作だ。其他珠玉の如き苦心の作品ばかり。これだけの質と量とを持つ創作欄は本誌でなくては求め得られないところだ。

編輯だより

◆懸賞入選の結果は、幾多通り民衆の大勝となつたが、絶対多数を擁しているものになつては居る。選挙権國民に公約した産業の合理化政策の實現についても、半形に落ちない爲、國民は望みを立つてはならぬ。

◆期待されてゐた無産階級は意外にも満足を現した。大衆が大衆自身の使命に覺悟してゐないことにも、一年の加は無産階級自身にもある。統一せよ無産階級！

◆文字通り海外に出て開かれた河上肇は「第二資本物語」の代りに「海軍関係」を寄せられた。文壇問題の糾弾してゐる折柄矢内原博士の論文は必須を論すべきもので、其他田中耕太郎氏、山内得志氏等權威ある新報社に見られよ。

◆本誌の創作欄は体観だ。懸賞入選作を初め廣津、小林、金子、吉田の諸氏いづれも百枚を超ゆる大作だ。其他珠玉の如き苦心の作品ばかり。これだけの質と量とを持つ創作欄は本誌でなくては求め得られないところだ。

◆日本探偵小説連「分」は三月の刊本を以て完結した。「社会科学大叢書」は漸く印刷を終へんとする。

改訂	定価	冊数	注意の文註	
			意注	文註
昭和五年三月十八日	四角	五拾	◆外注は凡て御会に申受く前金切の	◆御注文は凡て御会に申受く前金切の
昭和五年四月一日	四角	五拾	◆外注は凡て御会に申受く前金切の	◆御注文は凡て御会に申受く前金切の
昭和五年四月一日	四角	五拾	◆外注は凡て御会に申受く前金切の	◆御注文は凡て御会に申受く前金切の

発行所 (東京) 改造社
 支店 (東京) 下町四丁目四〇番地
 支店 (東京) 八丁〇番地
 支店 (東京) 二丁目二二番地

ブルジョア (當選)

芹澤光治良



これら刷滅する階級の一應である。

租税の大半を、軍備に奪はれない國民は、仕合せである。

「スイスは夢の國です」

「此世の天國です」

此言葉は、階級の夫の轉地に從つて、巴里を去る時には、フランス人に獨特なお世辞だつた。山、湖、空、光、色、總て、スイスに來てからは天國のものだつた。然しフランス人達の聞かせて呉れた言

葉が、單なる慰安でもなく、景色について言つたことでもない、一年暮して漸く、澤夫人には解つて來た。

海洋に浮べる艦の代りに、雲を泳ぐ山々に送られる。兵營内で空しく消耗される若い生産力は、アルプスに自動車用のアスパルト路を掘くに費す方がましである。人を殺すことに専心するよりも、單なる饑饉であり、饑饉に終るものでも、人間生活を豊にししようと努力することが、どんなに良いか、夫人はほんやりと、胸を心配せずにあられる國の幸福を、日常生活のどんな場合にも知らされる。雪にたりさうなので、急いで買物をまとめてから、階段のやりに昇る前、レストラントで、登山靴を待たされた。靴下の歩道の掃子

昭和初期の貨幣価値からすると、1500円はおおよそ、現在の500万円くらいでしょうか。

懸賞創作入選發表表

青 春 (小説) 夜の群像 (戯曲)
 同 志 (戯曲) 田園風景 (小説)
 Cの遺稿 (小説)

入選者略歴

壹等入選者 芹澤光治良
 大正十一年東大経済學部を出て、直に農商省に入り、高等官、從七位。三年半で、一本道な一生を獻つて巴里に渡り、四年半遊學。最近歸朝。現住所、東京市外上落合二〇六

貳等入選者 大江賢次
 明治三十八年九月二十日、鳥取縣日野郡溝口村に生る。尋常小學が終ると野良(ウツ)出され無期のやうな慘な貧困十年。鐵道工事の土工、トンネル穿鑿のトロ押し、開墾、炭焼、木炭、日傭稼ぎ。搾られ盡して、吹雪の底で自殺を計る。果し得ず郷里を飛び出す。人道主義の書生、雑誌記者、工場労働、労働者農民を救ふものはマルクス主義であることが解り出す。朝鮮、滿州、シベリヤへ放浪し最近歸つてきた。現住所、東京市外下落合中井一六五八。

選外佳作
 蕃婦と蕃地警備員(小説) 鑛夫の斷片 (戯曲)
 ジャップ・タテ 勝 敗 (小説)
 赤い機關 (小説) 貧乏大學生 (小説)

壹等入選 (賞金壹千五百圓)
 ブルジョア (小説) 芹澤光治良

貳等入選 (賞金七百五十圓)
 シベリア (小説) 大江賢次

その時、一通の速達の封書が届いていた。田部邸に速達で配達されたものを、再び田部氏が速達で廻送してくれたものだ。次郎は急いで開封した。

「本誌第三回懸賞小説に応募した貴作『ブルジョア』は、今度、一等当選に決定いたしました。つきましては、五月号に発表するにあたって、貴殿の近影（半身像）が必要につき大至急本社編集部へ送って下さい」

まるで棒でなぐるように無造作な文面だ。次郎はめまいがしそうだった。投稿したことも忘れていた時に、舞いこんだ手紙だが、信じられなかった。小説家の檜舞台のように言われる総合雑誌の編集部が、こんな粗末な用箋に、こんな無器用な文章を書くであろうか。悪意のある第三者が揶揄するために、いたずらをしたのではなかろうか。しかし、小説の題名は自分と雑誌社としか、知らない筈である。すると、当選したというのは、ほんとうか。次郎は誰にでもきいてみたかった。近影をすぐ送れと言っても、写真がない。一郎は新聞社から帰っているだろうか。ジャーナリストとして、彼なら判断ができよう。おそいが、一郎を訪ねることにした。疲労も吹きとんでしまった。／ 一郎は珍しく早く帰ったと言って、茶の間で、独り日本酒をちびりちびり呑んでいた。子供達もみな寝て、やっと静かになって吻とした表情で、次郎のおそい訪問を訝かった。しかし、次郎の速達を見るなり、これはすばらしいニュースだ、お目出度うと、飛びあがるようにして、／「おい、四郎も五郎もこっちへ来ないか。次郎君のために祝杯をあげるんだ。お前達も酒を飲むだろう」と、玄関横の四畳半の方へ呼びかけて、自分で盃や酒瓶などを探しに立った。／ 四郎も五郎もその速達便を見て、すごいんだなあ、感嘆の声をあげた。四郎は高等小学校を出てから、鉄道省の講習所の試験に合格して、ずっと現業員として働いているが、次郎はほとんど会ったことがなかった。五郎も大学予科生だが、二三回顔を見たことはあるが、話をしたことがなかった。／ 「この雑誌に一等に当選すれば、小説家として活動できるが、次郎さんが小説家志望だとは知らなかった——すごいなあ」／ そう、顔を輝かして、懐けるように見る五郎を、次郎はいつくしむように眺めた。／ 「どんな小説ですか。早く読みたいですね」

—中略—

このお粗末な手紙は冗談ではなかった。誰にも秘密にして投稿した小説が、日本一といわれる総合雑誌にとりあげられるということだ。一郎や五郎の感嘆するところをみると、それによって、日本で小説を書いて行く道が、自分にも拓けるかも知れないのだ。信じられないことだが、自分の前に、天から鎖がおりて来たようなものだ。その鎖を握れば、自分は思いがけなく小説家の世界に引きあげられるかも知れない——そう、自分の心に語っていて、一郎の饒舌が耳に入らなかった。（『人間の運命. 第二部第一巻. 孤独の道』

『人間の運命』— 芹沢自身を仮託した主人公の作家森次郎の半生を、日本の近代史を背景にして描く

芹沢が『人間の運命』を書くに当たって、一切の注文原稿を断わり、日本では異例の書き下ろしによる出版を選んだことは、よく知られている。すでに30年に及ぶ作家としての経歴を持ち、数々の名作を国内外に問うていたが、芹沢文学の代名詞となる、言わば“生涯の作品”を企図していたのである。昭和37(1962)年に新潮社から第一巻を出版し、当初予定の全六巻を刊行し終えた時点で、作品の評判は巻を追うごとに高まり、昭和39(1964)年度の芸術選奨文部大臣賞を受賞した。そして、読書界の続巻への切望に応じて第二部六巻、第三部二巻と書き継ぎ、昭和43(1968)年に六年余を経て完結し、日本芸術院賞を授与されることになった。芹沢の望みはこうして見事な結実を見たのである。／ 以後、芹沢は昭和47(1972)年に『遠ざかった明日』を『人間の運命』の続篇として書き下ろし、昭和49(1974)年からの『芹沢光治良作品集』全十六巻にこれを収録するのに際し、第一巻に先立つ「海に鳴る碑」を書き下ろした。そして、昭和51(1976)年には『人間の運命』の本体だけを、新たに手を入れて新潮文庫から全七冊で、平成3(1991)年にはやはり全七冊セットの愛蔵版で刊行した。この作品がいかに歓迎されていたかを物語る出版歴だろう。しかし、芹沢には一つの不満が残っていた。それは全十四巻で流布するものを、その後に刊行した『遠ざかった明日』と『海に鳴る碑』を併せ、全十六巻として産み直したいという希望である。

昭和57(1982)年、妻の金江を亡くした芹沢は八十五歳になっていた。失意の中で自らの余命を数える思いもして、新たな創作へ気持ちの向かわない日々を、身の整理に向けるようになった。数多い自作の短篇や長篇の再読もその一つで、没後に全集が編まれる場合に残したい作品を選別したという。その中で特に拘ったのが、先の不満を解消したいという願いで、『人間の運命』を再読三読して手を入れることになったのである。／ 芹沢は作品の細部の字句の修正から、必要な加筆や削除を、全体に亘って入念に施している(巻頭の写真参照)。こうして“生涯の作品”である『人間の運命』は全十六巻として芹沢の手元で生まれ変わるようになったが、生前も没後も出版されることなく、長く遺族の手元に残された。この度の完全版『人間の運命』は、その芹沢の強い遺志を汲んで、手沢の訂正本を底本として刊行するものである。平成25(2013)年は没後二十年を迎え、これは遺族の抱き続けた宿望の実現でもある。／ 装いを新たにした完全版『人間の運命』の概要を記すと、芹沢自身を仮託した主人公の作家森次郎の半生を、日本の近代史を背景にして描くものである。作品の枠組みになる時間は、明治29(1896)年と考えられる日清戦争後の次郎の誕生から、昭和26(1951)年に次郎がスイスでの国際ペンクラブ大会に参加したヨーロッパ滞在までに設定されている。その間の次郎の半世紀あまりの人生の歩み、つまり様々な困難を克服しての成長、人間の幸福を真摯に考える作家の生き方が、『人間の運命』の中心である。そこには芹沢文学の主調である、明るく温かいユマニストの精神が横溢している。したがって、まず大河小説が特色とする教養小説的な性質を有していると言えるが、それだけでない多岐に亘る内容を盛り込んでいるところに特色がある。(「完全版『人間の運命』刊行の辞」勝呂奏. 『完全版. 人間の運命1』 Pvi. 2013. 勉誠出版)

「天理教本部」掲載の『改造』目次



「天理教本部」が掲載された『改造』昭和6年5月号の目次です。騎西一夫の名前で発表されています。隣には、『蟹工船』で有名な小林多喜二の名があります。

作	創
説小 失はれた指輪	小説 才
久米正雄	天理教本部(當選)
十一谷義三郎	騎西一夫
小林多喜二	ク



作	創
説小 失はれた指輪	小説 才
久米正雄	天理教本部(當選)
十一谷義三郎	騎西一夫
小林多喜二	ク

職業婦人の左翼化傾向	山本和子
開 争	村尾藤男
シンプラジールの自然	荒川實藏
尖端流行歌漫談	添田颯輝坊
婦人劇場巡回公演記	菊川忠雄
農村劇場巡回公演記	金子洋文
十字路に立てる日本農民運動	稲村隆一
不良少女の流行	サトウハチロー
黎明の女	大佛次郎
許さざる女の肉體	西條八十
ソヴェート映畫の指導原理	三好達治
浮世繪の特殊地位	昇曙夢
文藝時評	阿部次郎
上野の春	小林秀雄
チャップリンの雑記	川端康成
若槻新總裁論	室生犀星
	佐々弘雄

世界情報	...
議 會 政治の老衰	山 川 均
民政党内閣の財政政策を發く	鈴木茂三郎
政局を支配するもの	佐々弘雄
銀 座 縦 横 記	直木三十五
現代學生の享樂種々相	畑 耕一
バスチユ牢獄の人々	丸木砂土

改造 五月號 目次	...
恐 慌 深 化 の 新 局 面	猪俣津南雄
議會を如何に改造すべきか	磯山政道
現代に於ける哲學の貧困	三枝博音
地代理論の展開のために	向坂逸郎
没落か更生か 既成政黨	...

「編輯だより」には、小林多喜二の作品と併記され、「新鋭二氏の全面的努力の結晶として五月創作壇の双壁」とあります。

◇藤西君の「天理教本部—小林君の「オルグ」は堂々百五十枚の雄篇。新鋭二氏の全面的努力の結晶として五月創作壇の双壁。

—(りよだ輯) (111)

編輯だより

◇上野の花も散りかかる。四月十三日、濱口内閣は総辭職した。

◇濱口内閣の功罪は別に論ずるとして、濱口君は氣の毒であった。若槻、安達、尾崎の決戦に若槻君は優勝した。しかし若槻君によりどんな新政策が提唱されるか、大衆の期待は何にもない。

◇今回の政變により我國は矢張り「官僚の國」であることが痛感された。平民宰相の期待も空しく、上院の議席から二百七十頭顱が指揮される。

◇木村毅君本社特派員として米國、加拿大、英國等へ赴く。淺原健三君も渡米した。ソビエトへも四月末本社より特派する。

◇新小説の原稿は御約束した如く断じて返還しません。それからいろいろの原稿を山本宛てに送らるる向も多いが、今後は必ず「本社編輯部」宛てに送つて欲しい。

◇諸侯君本月の「恐慌深化の新局面」は、刻下最重要の論文だ。向坂君の「地代理論の展開」のために「また心血を凝らされた研究論文だ。野川君の「シンパサイザ」挿話「村尾君の「闘争の春」も必讀に値する。

◇藤西君の「天理教本部—小林君の「オルグ」は堂々百五十枚の雄篇。新鋭二氏の全面的努力の結晶として五月創作壇の双壁。

◇「經濟學全集」今月配本は「經濟政策(上巻) 河津、氣賀、八木澤三氏の力作を収めた。また「心理學及藝術の研究」上下二冊は松本幸太郎博士記念論文として刊行された。博士の遺稿を讀して友人門下諸氏が博士の功績を永遠に記念する爲の論文集である。

◇我が左翼文學界最大の教養である蟹工船、太陽のない街、獄の語が近(一冊となり出版される。前二者は已に歐譯されて歐米大衆の間に非常なセンセーションを巻き起してゐる。

◇「石川啄木全集」(山本有三全集)に次いで「有島武郎全集」の第一巻が刊行された。かくて「日本文學全集」は檢査の塵を以つて満たされ、重版又重版の狀勢を續けておる。

◇現代日本文學全集四月の配本は「新興藝術派文學集」として十一谷、川端、池谷、龍崎寺、中河謙氏の傑作を集成した。

◇谷崎潤一郎氏の「己」は近く出版の運びになる。河上博士譯資本論は博士一世の事業として、従来の譯稿を訂正補遺された努力の結晶で、完成の上は資本論の日本語として定譯本の名を贏ち得るであらう。

◇目下計劃中の「明治前記財政經濟史料集成」全二十巻は永らく大蔵省の秘蔵庫に蔵された特殊書ぞろひであるが、我國資本主義發達の特殊性の研究には缺くべからざる根本資料だ。

昭和六年 四月十七日 印刷納本 昭和六年 五月一日 發行	定價五拾錢 發行所 改造社 東京芝區東谷下町四ノ四〇 電話芝(43) 二二二二	改訂 定價五拾錢 發行所 改造社	注意の文註 ▲御註文は凡て前金に申受く前金切の時は發送を停止す ▲増大號其他定期變更に依る前金切不足の時は御持込を待つて發送を發 ▲外國よりの御註文は郵費實費を申受 ▲見本御請求の向は檢査又は郵券にて ▲定額通り御持込ありたし但し郵券代 ▲物持込は振替によらるゝを最も便利 とす
		改訂 定價五拾錢 發行所 改造社	注意の文註 ▲御註文は凡て前金に申受く前金切の時は發送を停止す ▲増大號其他定期變更に依る前金切不足の時は御持込を待つて發送を發 ▲外國よりの御註文は郵費實費を申受 ▲見本御請求の向は檢査又は郵券にて ▲定額通り御持込ありたし但し郵券代 ▲物持込は振替によらるゝを最も便利 とす

天理教管長。
 村多。(天理教本部員。老人)
 小杉。(本部員。天理外語教義課講師。老人)
 加東。(天理女子學院生徒監。元外交官夫人)
 高井。(本部青年)
 薄田。(元天理外語生徒)
 寺島。(天理教支那傳道處布教師)
 山村。(天理外語スペイン語部生徒)
 藤山貞吉。(天理教校生徒。肺病患者)
 小野。(教校生。その友)



人物

天理教本部 (三幕) (當選)

宗教の批判はあらゆる批判の前提である。マルクス—

騎西一夫

藤山三郎(貞吉の兄)
 高橋(K大教會信徒事務所事務員)
 土屋(宣教師。貞吉をお助けした布教師)

その他話中の人物として管長夫人悦子、元外語生徒黒川、曾つて女流テニス選手として鳴らした天理高女の淵本等多數。

時。一九三〇年五月中旬頃。

場所。天理教本部所在地である、奈良縣丹波市町。

第一幕

アクト 1

松木一夫の「天理教」という戯曲は、教団に大きな衝撃を与えた。文学作品の題材になるさえ、迷惑なことであるが、この作品は、新しく神の代理として活動をはじめられ、全教団が信仰の中心としてあがめている若い管長のお面を叩き、頭から人糞を振りかけるような、不敬な書き方で、管長と天理教とを侮辱している。

天理教の関係者には、総合雑誌を読む人が少ないから、最初は気がつかなかった。新聞広告を見ても、騎東初郎というペンネームであったから、例の如く、悪意ある人の天理教批判だろうと考えて、雑誌を買う信者もなかった。天理教本部でも、最初は、松木が自慢してもらしたので、友人達だけが知ったが、ひたかくしにした。しかし、間もなく天理外語の先生が、雑誌の写真で、松木であることを知って、狼狽して問題にした。管長を侮辱しているから、看すごすわけに行かなかった。

露語科主任教授が本部に山沢為次先生を訪ねて相談した。山沢は管長の親類筋で、東大の社会学科を卒業後、本部に帰って、天理教の経営する諸学校を主管しているが、天理外語の生徒は、教団で最も進歩的な人物だとして、みな私淑して競って私宅を訪ねては、身上相談までしているが、松木も山沢から目をかけられていたからだ。

山沢はすぐに、松木が止宿している水口大教会の詰所へ、松木を迎えに人をやった。詰所では、彼が二週間以上も前に、沼津へ帰ったと告げた。山沢は沼津の教会に電報をうって、松木に帰るようにすすめた。水口大教会の詰所でも驚いて、直ちに岳東分教会長へ松木の事件を知らせた――

岳東分教会長は詰所からの通知で、初めて知り、雑誌を買って読んでみて、仰天した。前年十一月末に、駿豆地方に大地震があって、その時、百畳敷きの大会堂や華麗な教祖殿の屋根瓦まで飛び、役員の家が崩壊するほどで、その恐怖が今も肌に残っているが、この作品を読んだ時の恐怖や驚愕は、それ以上で、しばらく全身のふるえがとまらなかった。すぐ次郎の父を呼びつけた。次郎の父はその日も、教会長をしている沼津支教会に出向いていた。タクシーですぐ迎えて来いと、分教会長は青年に怒鳴った。

タクシーに迎えに来られて、次郎の父、森老人は何用かと、心配して分教会長室へ急いだ。会長は部屋の真中で、書見をしていたが、森老人がはいると、くるりと向きなおり、目を剥き出して、これを見ろと、一通の封書と雑誌を投げてよこした。激怒で声がふるえていた。

「なんでございましょう」と座って封書を見た。水口大教会の詰所主任の手紙であった。

「そっちの雑誌を見るんだ……松木一夫がとんでもないことをしでかした……目次の天理教って、ところだ……読んでみなさい」（『人間の運命第二部第二巻. 嵐のまえ』P175. 新潮社. 1965）

文中の孝三というのは、松木の中学同級生で、森の同級生の弟であるところから、松木と森が親しくなるということになっています。ここでは、森が松木の親から「中学校をやめないと、生命がない」と言われたことがあるのに、自分の子供には「上級学校へ行けて」言う矛盾が語られています。

孝三が松木は革命家になりたいんだということに、森は「お父さんが宗教によってしようとして、できなかったことを、政治的な革命でしたいと、言うのだろう、松木君は」と松木の代弁をします。天理教本来の教えは革命的だったんだという光治良の思いが出ているように思います。

「ぼく、森さんのこと、亡くなった父から聞きました。一高にいる頃、一回絵ハガキをくれたそうですね」／ 次郎は上衣を脱いで、窓の近くに、両足をながく投げ出した。色の黒い、やさしい目をした小柄な栄養不良のような少年で、白いシャツに、霜ふりのズボンをあつそうにはいているが、これが、仁丹の看板のような八字髭にチックをつけて、堂々と気取っていた松木会長の子供であろうか。／「そうだった。中学校をやめないと、生命がないと、お父さんに言われたことがあるので、死なないで一高に入学しましたよと、抵抗のつもりで、入学早々絵ハガキを出したな……生意気だったから——」／「ぼくには、次郎さんの真似をしろ。中学校を出て、上級学校へ行けて……いつも激励しましたよ。一年の終わりに亡くなったけれど。おかしいですね」／「お父さんは会長だったもの、会長の子弟は学問してもいいんだらう、天理教では……来年は何処を受験するの」／「天理外語へ行くなら、岳東の会長が学費を出してくれると言うから、来年でなしに、五年を卒業して、天理外語のロシア語を受けるつもりです」／「天理外語って、海外布教のために、天理教がたてた専門学校だろう？ ロシア語を受けるって、まさか、ロシアに天理教を布教するつもりじゃないのだろうね」／「天理教では、今に日本がシベリアに再び出兵するか、移住民を送るかして、シベリアが日本化するだろうと考えて、その時のために、天理外語にロシア語をもうけたのかも知れません。国策に協力することに必死ですから——」／ そう松本が言うのを、孝三が遮った。／「森さん、松木はロマンチストだから、ロシア語を勉強して、ロシアへ行って、革命家になるんだと言うけれど……革命家になるのには、リアリストでなければいけませんね。革命なんて、ロマンチックな詩を書くように簡単ではありませんね」／「そんなつもりで、天理外語に行っているの？ 天理外語は天理教本部にあるのだろう？」／松木は人の好きそうな微笑をして答えなかった。／「松木はね、お父さんが天理教でしたことを、革命でするんだと、言うんです。だから、天理外語へ行っても、平気だという考えです。だが、信仰でしたことを、革命ですることができるか、ぼくは疑問に思うがね……」／「お父さんが宗教によってしようとして、できなかったことを、政治的な革命でしたいと、言うのだろう、松木君は——」／「それならわかるけれど、松木はお父さんの宗教と彼の革命とは、同じ目的だと、言うですからね」

（『人間の運命第一部第五巻. 失われた人』P248. 新潮社. 1964）

下の文は「天理教」の作者、松木一夫が天理外語に進学するにあたり、森次郎が天理教の本質について研究してほしいと依頼するところです。この依頼があったので、一夫は「天理教」を書いたという筋書きになっているようです。「石田」というのは、「孝三」のこと。

……最後に松木に言葉をかけた。

「松木君、天理外語に行ったら、革命を考える前に、一体天理教とはどんな信仰か、本気に研究してくれないか。本部に四五年いたら、本部のありかたも観て、天理教の本質をとらえられるだらうからね。ぼくなんか、信者や布教師の苦しい生活は識っているが、天理教については、本質的には何も知らないんだからね。君やぼくの両親が、財産をなげうち、一生をささげているものが、それに 価値するものであるか、どうか、君が天理外語に入学したら、是非研究して、教えてくれないかね」

「はい。数年待って下さい。お約束します」

「天理外語へは、ほんとうにやってもらえるの」

「私が将来、おやじのあとを継いで、天理教の会長になるものと、岳東さんで考えているから、やってもらえると思います。私も天理教をやるからと言って、天理外語に行かせてもらえよう努力します」

「そんなら、革命家になるなんてことを口にはいけないよ」

「石田は同志だから、話したんです。なあ……でも、今度は森さんとの約束ができたから……天理教をほんとうに勉強したいから、本部の学校にやってもらいたいと、岳東の会長に頼めます。会長は喜んでやってくれると思います」

「研究の結果、天理教の会長になってもいいからなあ」

「本気で仰しゃるのじゃないでしょう？ 私はおやじなんかの信仰生活を見ていて、宗教の限界を知ったから……おやじのようになりたくないですね。森さん、天理外語に行っても、信者にはなりませんよ」

(『人間の運命第一部第五巻. 失われた人』P252. 新潮社. 1964)

松木が天理教本部で知ったこと①

ここは、松木がすでに改造社に応募作を送った後、まだ当選するかどうかわからない状況で、森と会話するところです。正善管長が東大を卒業して本部に帰り、「教学だとか海外伝道だとか、ばかに熱心」にやっていることなどが語られています。

松木は次郎の実父が教会長をしている、沼津支教会の後継者である。松木の父が亡くなった後、後継者がまだ中学生で、教会長になれないために、次郎の父が上級からの命令で、教会長になって、毎日岳東分教会から沼津支教会にかよって、教会長の役を果している。次郎の父も松木の母も、松木が中学を卒業して、一年間天理教本部の教校で修業して教会長になる日を、待ちわびていた。しかし、松木は天理教本部へ行って、教校に入学しないで、その頃天理教が海外伝道のために新設した外語専門学校の露語科に、入学した。彼は海外伝道に関心があったのではなく、ロシア革命と新しいソビエト・ロシアの政治を知りたいからだ、次郎に打明けたことがある。その外語専門学校を、松木は前年卒業したはずだが、沼津へもどって、予定どおり、沼津支教会長に就任したろうか、次郎は興味を覚えた。

「君は教会長に就任したのではないの」／「森先生が今も会長をしていますよ。先生のおかげで、母や弟など家族は、みんな教会で食べさせてもらっているから、ぼくが会長になるまでもないです。それにぼくはまだ本部にいますから」

「此奴はその懸賞作品をぼくに見せるために、わざわざ出て来たんです。今夜帰るんだろう？」

「石田の力をかりて、作品を書きあげて、今朝送ったから……すぐ丹波市へ帰るつもりでしたが、森さんが来るというので、待ってたんです……なにか編集者に働きかけた方がいいでしょうか」

「働きかけるものにも、発表を待つより他にないでしょう……本部で何をしているの。まだ卒業していないの」

「卒業したけれど、あそこになれば、学生生活のつづきで、研究もできますから……それに、学校が若いし、先生も若くて面白い人が多いし、とくに、ロシア人の先生がいい人で、結構たのしいですよ。それと、中山管長が東大を卒業して帰って、教学だとか海外伝道だとか、ばかに熱心なもので、岳東分教会長もぼくが卒業したからって、すぐ帰って来いと、言わないから助かります」

「すると、君は天理教をやるの……いつか言ってたけれど、親爺が宗教でしようとしたことを、政治で実現するために、革命家になりたいから、ロシア語を勉強するって——」

「革命家になるのに、ロシア語は必要ないと、わかったけれど……職業には、天理教の教会長もいいなあと、思ったこともあります、どうせ、何かの職につかなければなりませんから……すぐに革命的な政治家にもなれないですものね。でも、この頃のような不景気がつづく、小さな教会の会長は、職業としても、辛いから、はっきりぼくはあきらめました。それで、今度の作品を書く決心がついたけれど、

万一当選すれば、本部からも、天理教からも追い出されるでしょうね」／「すると、天理教をはなれる決心をしたというの」

「それが……人間の習慣や信仰などから自然にできた生活感情というのは、どろどろに自分のなかにくっついていて、頭ですてられても、生活感情まで清算するのは、困難で……決心と仰言るが、その決心がつきかねるんです。だから、懸賞作品が落選すれば、当分はずるずる天理教の本部にいるかも知れません」

「此奴は意気地がないんです」と、孝三が笑った。▽（『人間の運命第二部第二巻・嵐のまえ』P80）

松木が天理教本部で知ったこと②

「天理教の信仰のなかに、なって来るのが天の理というのがあるんです。だから、ぼくは不決断な自分をその作品に賭けたんです。万一当選すれば、それは、お前の選んだ道を行けという、神の啓示ですから、決然と文学から社会革命の道へすすむことができますと思います……落選したら、当分本部において、文書宣伝でも手伝いながら、待機するつもりです」

「此奴が信仰をすてきれないのが、ぼくは歯痒いんですよ。森さん、此奴を説得して下さい」

「ね、君はこの数年、本部で、天理教の中心で暮したんだらう？ そして、信仰や宗教についても思索したらう？ だから、聞かして欲しいんだが、ぼくは天理教を知っているようで、ほんとうは知らないけれど……、君のお父さんやぼくの父が、一生をささげたが、天理教はそれだけの価値ある宗教かね」

「森さんは外国へ行く前に、ぼくに同じことを言いましたね。本部でロシア語を勉強するなら、同時に、天理教を研究して、それを聞かせろって……」

「そうだ、君にそう頼んだのだったね」

「父たちが全財産をすて、貧乏のなかで一生をささげて実践したことは、ぼくの目にはばからしく映るけれど、信仰というのは、あの実践のなかにしかないのでしょうね。本部で暮していたからって、……本部に集って来るそぼくなたくさんの方の澄んだ眼や、謙虚で正直で親切な態度のなかに、信仰を感じたが、**天理教という教団のなかには、特別信仰を感じませんでしたよ**」

「そうではなくて、**教え自身のなかに、それほどの価値ある真理、教義があるか、それを知りたいんだけど——**」

「森さんも小さい頃から、教祖の言葉とか、教祖の生活とかいろいろ、耳にたこのできるほど、聞いたでしょう？ 本部にいたって、あれ以上に深い教義を聞く機会はありませんよ。尤も……十年ばかり前には、丹波市で新宗教という雑誌を出して、天理教の改革を主張したインテリ信者が出て、教義の新しい研究などを発表したそうですが、その新宗教運動も、本部からつぶされたと言いますよ。最近では本部の先生方の子弟で、大学出のインテリもあって、その人々が教義を確立しようという気運が少しあるようですが、それも、中山管長が昨年東大の宗教科を出たことに関係があるらしいです……**管長は在学中に姉崎博士から、宗教学の特別指導を受けた知識人で、今まで秘密にしてある教祖の書きのこした直筆なども、印刷にして、教会に配布する計画だと聞きますから……そんなものが出版になって、幾年かたったら、教義らしい教義ができあがるのじゃありませんか**」

ふさ子が母屋の方にお茶の用意ができたからと、迎えに来た。松木は母屋へ歩きながら、声を落して次郎に話した。

「管長は天理教では、神の代理です。だから、管長が大学を出た、結婚をした、ということで、天理教では新しい信仰の時代が来るように喜んで、期待もし、信者をあおっています。でも、**ぼく達は学生で、本部で会う機会もあって、管長を識っているが、あくの強い坊ちゃんですわ。神の代理なら、天理教の象徴であるから、その人に会ったら天理教を感ずるはずだが、あれが天理教なら、かなわんと思いますね、生活のなかに教えを実践しているところが、微塵もないですよ**」

(『人間の運命第二部第二巻. 嵐のまえ』 P82. 新潮社. 1965)

中山正善
の結婚

2代管長中山正善の夫人は、寺島という人の彼女だったのを正善が横取りしたということがこの前段に書かれています。実際、正善の夫人節子は、名もない布教師の娘だったようで、結婚に際し、山澤為造の養女という形をとっています。

B。道理で。秀司先生つて、奴の祖父さんで、嬢を五度も代へたといふ浮気者だ。つまりだね、管長の魂はそいつとおなじだと本部では（天理教本部を指す。）説いているんだ。
C。ぢやあ、管長の夫人が雙子を生んだのはどうしたんだ。まさか二人いつぺんに生まれ代つたのでもなからう。
A。さあ、誰の生まれ代わりかねえ……。 （聲をひそめて） ことによると張家口で傳道してゐる寺島君から、管長め、悦ちやんを横取りした罰かも知れないぜ。管長はその前にも黒川君で自分の友達を失戀させた札付だからね。
－中略－
C。それに違えねえ！ 天理教のドグマを拝借して解釈すると、二人の男を失戀させたから、その因縁で雙子が生まれたんだ。ははあ、なるほどね。（「天理教本部」 騎西一夫. 『改造』 昭和6年5月号. P4）

布教師の
粗製乱造

別科のことを「一年に傳道者を五千人も粗製濫造する」とあります。「部下の教会の極端な貧窮化」「娘や息子に稼がしてやつとイキをしてゐる」という状況はすでに昭和の初めからあった問題だということが分かります。

薄田。奴等のヤリ口は×××そつちのけだ。平均して一年に傳道者を五千人も粗製濫造する宗教は天理教位のものだろう。無学の爺さん婆さんまで入学させて、たった半年で一人前の先生にデツチあげるのだから驚く。だが先は見えてるね。 **部下の教会の極端な貧窮化を見るがい。娘や息子に稼がしてやつとイキをしてゐるのではないか。**（間。）……山村、學校は面白いか？ 毎日行つてる？
山村。つまらないよ。くだらない天理教々義の時間が多いので退屈だ。おれはやめようかと考へてゐる。
薄田。それがいゝ。そんな學校にゆくより何か仕事をした方がマシだ。できたら職場に入つてABCから始めるんだ。
山村。おれもさう思つている。／薄田。（低く）……外語には『戦旗』の読者班もないのか？
山村。前にはあつたさうだが……。今はだめだ。 **阿片**に酔つた、オブローモフの弟子のやうな奴ばかり揃つてゐる……。
（「天理教本部」 P20）

オブローモフ→ロシアの作家ゴンチャロフの長編小説。無為徒食の代名詞

「天理教には立派な理想がある」という話から、心定めへと移り、道専従と牛一頭の献金をすることになります。引用はスペースの関係で「略」ばかりで分かりにくくなっていますが、心定めをさせる話術の一例が書かれています。

土屋。廣い世間の人的大部分は未だに天理教は淫祠邪教だなど罵っている。罵らなくても今日の隆盛を嫉んで悪口を言つてゐる。しかし天理教には立派な理想がある。何だ？ それは甘露臺世界建設、すなはち本教の教理によつて全世界を救ひ、全世界を天國のやうに平和に治めて、人類の故郷であるお地場に甘露臺を建てることだ。（熱を帯びた口調）おきよになるがいい。お地場が人類の親里であることは、あの楽しさうな叫びが何よりもこれを裏書きしてゐる。世界並みだつたら、大阪から丹波市まではるばると歩かんでいよ。電車の便もある。汽車の便もある。それを態々(わざわざ)歩いてまでも御本部に参拝させて頂くといふには、なにかの理法が其處(そこ)になくなくてはならない。

—中略—

土屋。さうだらうとも。神様の懐である御本部に住はせて頂いて、病気を助けていただけないなんて、お前さんとしても餘程考へねばならぬ。(促すやうに)どうだね。一つ踏張つて心定めをしたら……。

三郎。……。

—中略—

土屋。—前略— お金でも財産でも、神様からお借りしたものといふ真理だ……。(ぢつと三郎を見て)百万長者に生まれるのも因縁、水呑み百姓に生まれるのも因縁、すべてのものはこの天の理法にしはいされてゐる。だがその人の行ひによつて何時迄も金持でをられるわけでもない。貧乏人だからと言つて、何時迄も貧乏人であるわけでもない。藤山さん、わかるかな？

—中略—

土屋。(聲を落としてゆつくりと)……それに私はかう思ふんだ。あんたは神様に少しも感謝しないで當り前のやうに牛の乳を搾るつて賣つてゐる。定吉君がいくら滋養物を攝つても瘦せてゆくのはそのためだと私は思ふがね……。

三郎。(顔をかぶやかせて)先生、弟には一生お道をやらせます。また心定めをしるしとして家に帰つたら乳牛一頭の代金を神様に上げます。どうかそれを大教会の普請金や御本部様の献金に使つて下さい！（「天理教本部」P27）

山村。寺島、君アほんとに支那に行くかね？

寺島。(昂然と)行くんだ！さうして二度と日本には歸つて来ないつもりだ！

薄田。恋愛と神は別物か……。寺島、君には神様はそんなに有難いのか？ / 寺島。君は？

薄田。××？ さうだな、おれに言わせると××つて下駄の齒に挟つた石ころのやうなものだ。人間の歩行を困難にさせて、両足にマメでもお作り下さるのが精いつばいだ。

山村。よせよ。寺島。(寺島の肩をたたく。)君が支那を救はなくたつて、支那を救つてくれるものは他にもある。よせ、よせ。(飲む。寺島の煮え切らぬ態度を皮肉るやうに。)おい、南京蟲の手先になるのは止めろ。支那にはプロレタリアの朝が薔薇色に明けようとしてゐるぞ！

寺島。(呻(うな)るやうに)宗教は**阿片**だといふんだね。そんなことアない！お道は天啓によつて生まれた、人類を救ふ最後の教へだ。

薄田。おい、もつたい振るな。天理教の発生発展だつて唯物史観の立場から完全に規定づけられるんだからね。天理教は『谷底助け』と言つてプロレタリアの味方らしいことを主張する。『一列兄弟』とも説く。これは明らかに天理教が発生した当時の封建制度の桎梏に喘いでゐた農民のイデオロギーを反映したものだ。これは教祖が没落過程に立つてゐた小地主の人道的な妻君であつたことからでも證明できる。

寺島。ちがふ！御教祖様の家は、御教祖様が家屋敷田地を賣つて貧しい人々に施されたから没落したのだ。そんなことぐらゐ君だつてよく知つてゐる筈だ。僕は天理教は天啓の宗教であるとハツキリ斷言する！

薄田。頭とシツポが違つてゐる天理教神學の立場からかい？(冷笑)

寺島。御教祖の生涯は人類愛に燃えた戦ひの生涯だつた。あらゆる不正と戦はれた生涯だつた。だから奈良監獄に十九回も投ぜられたんだ。しかもそれは神様の命令によつてなされたのだ！

薄田。(つめたく)観念論、つまり奴隷哲學の観念から批判したらね。しかし事實はその逆だ。なるほど明治政府に天理教は小つぴどくやつけられた。教祖は十九回も監獄にぶちこまれた。なぜだ？『谷底せり上げ』——つまり極端にプロレタリアの利益を主張したからだ。たしかに天理教は最初のうちは民衆の味方しかつた。しかし宗團として一定の發達段階に達した今日ではどうだらう？見事に反動化したではないか。天理教資本主義をガツチリと形づくつてしまつたぢやあないか。

寺島。天理教は今だつて民衆の味方だ！

薄田。寺島、事實から眼をそむけるな。日本全國に蜘蛛の巣のように散在する一萬餘の教會は、天理教資本主義の工場だ。さうして六萬の布教師、五百萬の信者は愚かな労働者だ。 (「天理教本部」 P 33)

薄田。……殉教者か。立派なメタルだ……だが、天理教になることは、まるで××(※遊郭)にほうり込まれた女と同じだなあ。眼に見えぬ鎖にしばられて、逃げようと焦せば焦せるほど泥沼に深く沈んでゆく。そして骨と皮になるまで搾られ、利用価値がなくなるとそのままポイと棄てられる。寺島、君はどう思ふかね？ / 寺島。……。

薄田。棄てられなくたって、完全に人間性をスポイルされちまふ。すっかり無気力な人間になつて死んでゆくの精々だ。(苦笑。)山村、しかし君は奴等によくほうり出されないな？

山村。(腹立たしげに)これでも何萬といふ財産を教會に注ぎこんで死んだ信者の一人息子だ。やす／＼放り出されてたまるものか！

薄田。自惚れるな。危ないぞ！

山村。なんだつておれの親爺は天理教なんか夢中になつただろう。おれには分からない。

薄田。おれの親爺だつて。さう、おれの親爺なんかもつとひどかつたぜ。(廻想的に)おれの親爺は卅五年も忠實な天理教の教師として働いて死んだ。なるほど死ぬ迄には部属教會が十ばかりある教會長になった。小教正といふ位階を代償として本部から賜つた。(嘲るやうに)ところが、あの世にゆく際に着のみ着のまゝの僕達に残したものは何だ？ 手のつけられない貧乏さ！ 親爺は正直だった。子供のために財産なんか作らなかつた。むしろ親爺の生活を助けるために、おれの兄貴は十才ぐらゐの時からあちこちを轉々として稼いだ。さうだ、兄貴が稼いでくれなかつたら、親爺だの僕等は食つてゆけなかつたのだ。 / 山村。兄さんは何をしてたんだい？

薄田。大工だ。旅稼ぎ大工をやつてゐたんだ。やさしい、いゝ兄貴だつたよ！ / 山村。まだ生きてるのか？

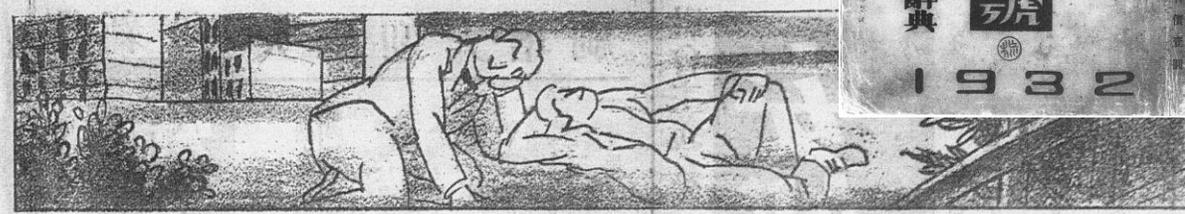
薄田。いや、ずつと前に死んだ。肺病でね。——兄貴の死ぬ時はかはいさうだつたよ。痩せてひよろひよろになった病人をつかまへて親爺の言ひ草はかうだ。『お前は神様の仕事を忘れて世界並みの仕事をするから、神様が残念に思つて病気にさせたのだ』つてさ！笑はせやがる！ 兄貴がおれ達の生活を見兼ねて働いてるのを、そんな風に責めたんだ。気の優しい兄貴だから我慢できた。兄貴はそんなことを言われても齒を食ひしめて黙つてゐた。(「天理教本部」 P 32)

社会事業に消極的な天理教

薄田。(重たく)……それから本部だつてさうだ。信者から××上げた金で、社会事業と名のつくものをひとつだつてやつてるか？『地場から打ち出す言葉は天の言葉』だなんてデマつて、阿呆のやうに従順な信者から×××金を何に使つてるんだ。——『金をあげろ』『心定めをして御本部に盡せ』……さうしてまで部下の教會を搾つてるのが本部だ。部下を裸にし、部下の生活さへ蹂躪してゐるのが本部だ。『智者と學者は後まわし』なんて言つた口先が乾かぬ間に、卅五萬も投じた圖書館を山の中に建て、豪勢ぶつたり、×××だの××なんて幫間のような學者に一杯のませて提灯持ちを頼んでゐるのが本部だ。『天理教取消請願』を議會に擔ぎ出す××代議士が出現すると、金を湯水のやうに使つて揉み消し運動に奔走したり、青くなつて政黨と握手するのが天理教本部だ。……天理教には、宗教家がお好きの社会事業なんて問題にならぬと見えるね。 / 寺島。みんな中傷だ！御本部は社会事業として養徳院を經營してゐる！

薄田。養徳院？ あの孤児院か。一生を馬車馬のやうに搾られた布教師の孤児の生活を保證してやるのが社会事業か。ハハハ。孤児をトラホームや皮膚病や栄養不良で、日蔭の茄子のやうにそだてるのが社会事業か。(「天理教本部」 P 36)

「天理教本部」が発表された翌年の4月特別号に芹沢光治良「鴉片」が載ります。目次には、「鴉片」の隣に小林多喜二の名があります。



創 作

小説	鬼道(入選)	張赫宙
小説	沼尻	小林多喜二
小説	鴉片	芹沢光治良
小説	細細の殺人容疑者	佐藤春夫
小説	アンとニーとクレオパトラ	正宗白鳥
小説	文壇	阿部次郎
小説	現狀	青野季吉
小説	魯迅	増田涉
小説	或人	阿部次郎
小説	第五回懸賞選作家懇親會の記	直木三十五
小説	足利	小倉金之助
小説	失業	大竹博吉
小説	我等の農民の代表として	小池四郎
小説	滿蒙の權益を民衆の手に	十谷義郎
小説	ラチオ殺人事件(探偵小説)	海野十三
小説	米國の前進根據地マニラとガム	伊藤正徳
小説	極東の海軍	平田晋策
小説	日米戦争は斯くして(大衆小説)	谷譲次
小説	着弾距離の上海	前田河廣一郎
小説	民政党内閣の命脈	馬場恒吾
小説	民政黨の前途	佐々弘雄
小説	春季特別讀物	

改 造 四 月 號 目 次

新滿洲國大觀(クラビヤ)……………矢内原忠雄

テロリズムと司法官……………末弘嚴太郎

滿蒙新國家論……………有澤廣己

日本は如何にすべきか……………赤松克麿

暴力問答……………久空

ヒットラーかヒンデンブルグか……………山川均

敗戦の無産黨……………二村定一

ブルジョア・デモクラシーの傑作……………石川千代松

政治の影を追ふた總選舉……………菊川忠雄

半處女物語……………岩田豊雄

不良少年軟派……………林美美子

アメリカ失業軍の「飢餓行進」……………二村定一

生物の生存闘争……………石川千代松

大戦危機途上の經濟地理學……………菊川忠雄

第二次五ヶ年計畫……………嘉治隆一

第二次五ヶ年計畫……………武内文彬

新「滿洲國」建設の巨頭……………武内文彬

長春奠都問答……………武内文彬

特別大附録 最新世界人名辭典

「信者」と改題された「鴉片」

「鴉片」は『改造』昭和7年4月号に掲載。単行本『明日を逐うて』（改造社、昭和8年7月）に収録されたときに、「信者」に改題されました。

なぜ改題したのでしょうか。

昭和8年2月20日、小林多喜二は路上で、特高課員に取り押さえられ、築地署に連れて行かれ、その日のうちに死亡しています。死因は明らかでしょう。

『人間の運命』の中にも、この時代、「社会主義者」の嫌疑をかけられて警察に連行され、転向書類を書かされる若者が複数出てきます。光治良自身も警察に出頭させられる場面があります。

マルクスの著作に「宗教は民衆の阿片である」という言葉があるのはよく知られたことで、《あへん》をそのまま題名にしていることは、内容に関係なく、特高に目を付けられる可能性があります。その辺を危惧したからではないでしょうか。

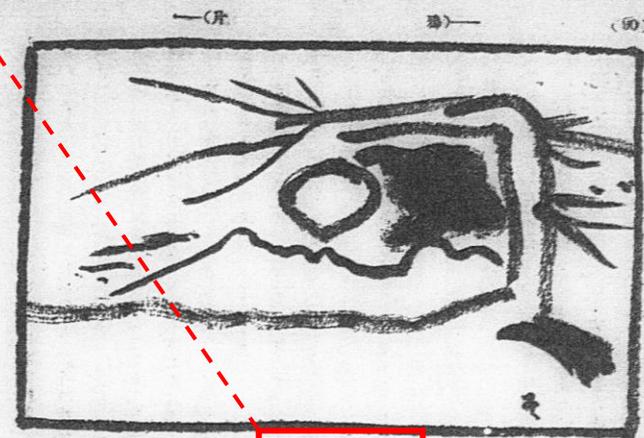
信者

『完全版
人間の運命18』
P143.勉誠出版.2013

南向きの縁から生臭い風が入る。障子をたてようとしたが、九月になつた
おかねは、それでも、障子の蔭に蒲団をずらせて坐つたが、胸がむかむかする。もしかしたら？
——三度もお産をし、末のがもう八つにもなつたが、直にそれに結び付けて、この一二ヶ月の気

南向きの縁から生臭い風が這入る。障子をたてようとしたが、九月になつた
許りでまだ暑い。おかねは、それでも、障子の蔭に蒲団をずらせて坐つたが、胸
がむかむかする。もしかしたら？——三度もお産をし、末のがもう八つにもな

『改造』1932(昭和7)年4月号



鴉片

芹澤光治良

南向きの縁から生臭い風が這入る。障子をたてようとしたが、九月になつた
許りでまだ暑い。おかねは、それでも、障子の蔭に蒲団をずらせて坐つたが、胸
がむかむかする。もしかしたら？——三度もお産をし、末のがもう八つにもな
つたが、直にそれに結び付けて、この一二ヶ月の気分の勝れぬことを、軽く思
ひ度かつた。夏の風邪は盡りにくい、と云ふが、軽い咳を伴ひ、寝る程ではな
いが生気がなく、口には出さぬものゝ、近來村の娘達が紡績工場から持ち歸る
勝利と云ふものではあるまいかと、おかねは滅入つてゐた氣持から、急に涙が
出て、頬のほてるのを覺えた。夜釣がなく夫の居る夜、夫の體に潮の匂が鼻に
つき、何とかして夫を拒否度くなつたのも、さうした身體の變調であらう。
が、三度の経験を顧みると、こんなことは初めてであり、それも年のせむ



明日を逐ふて

図書 芹澤光治良 著. 改造社, 昭和8 <645-45>

国会図書館蔵書検索

標題 / (0003.jp2)目次 / (0004.jp2)明日を逐うて / 5 (0006.jp2)我入道 / 179 (0093.jp2)信者 / 2
31 (0119).

『人間の運命』の中では、芹沢光治良の「信者」の方が松本一郎の「天理教本部」より先に発表されたように書かれています。実際は、松本のが昭和6年5月号に載り、光治良の「信者」は、翌年7年4月号に「鴉片」という題で発表になっています。

森老人は年下の会長から、こんな剣幕で話しかけられたことが、なかった。前会長から信頼され、分教会の長老の一人として、部下の教会や信者からも、尊敬されていたからだ。おもむろに、たもとから老眼鏡をとり出して、「天理教」という頁を探して読みはじめたが、とたんに、目がくらみ、建物が頭上に崩れ落ちたようで、分教会長が重ねて怒鳴る言葉も耳に入らなかった。

「次郎君があんな無信心なことを書いた時、しっかり神さんにざんげしなかったから、こんなことになるんだ……」

森老人はじっくり活字に目をとおしていたが、しばらくすると、放心したような顔を戸田会長に向けた。両方の目には涙がたまっていた。「一夫の奴は沼津の教会へ帰っていないかね」／「おりません」／「あいつ、四月の誕生祭にお地場（本部）へ帰らしてもらった時には、しばらくお地場で奉仕させてもらいたいなんて、ぬけぬけと、このわしにうまいことを言って、こんな不敬なことを書くなんて……おい、なにをまごまごしているんだね」／「はい——」／「すぐ支度するんだ。大教会へ行って、相談するんだ。お地場へ行って、管長様にお詫びして、進退伺いを出さなければならんからな……紋服の用意をして行くんだ」

はいと、森老人はあわてて、会長室を出て、会堂へ行き、神前にぬかずいて、先ず親神に詫びたが、次郎がその年の一月の末に、「信者」と題する小説を発表した時のことが、あざやかに思い出された。

その小説が問題になったのは、二月の初めであった。その時も、森老人は会長に呼ばれて、同じ雑誌をつきつけられた。その小説は天理教の信者の苦悩や悲哀が書かれていたが、自分も体験したことであり、自分の信仰のために、両親にすてられたようにして、孤独に育った次郎の苦衷が、にじみ出ていて、次郎を責める気にはならなかった。しかし、会長は天理教の信仰を小説に書くこと自体、不謹慎であり、親神に対する冒瀆であると言って、そんな不心得であるから、肺病にもなるのだが、また、そんな無信心な子を持つことは、親が信心が足りないからだから、しっかり神様にざんげするんだと、激しい口調で、責めた。森老人は自己の不徳を、会長に詫びて、すぐ会堂へさがり、独り神前にぬかずいて、一時間以上ざんげの祈りをささげた。／ 間もなく、岳東支教会内では、次郎が天理教を批判した小説を書いたと言って、非難が次郎の両親に集った。非難する人も、実際には問題の小説を読んだのではなく、ただ会長の憤怒からそれと知って、帝人を出て洋行までしながら、そんなだいそれたことをするのは、高慢な心があるからで、肺病になるのも無理はないと、噂をしては、息子の心を救えないのは親の不信仰からだ、かげでこそそそ非難するのだった。次郎のすぐ下の弟の三郎は、父の信仰をついで、分教会で青年勤めをしているが、そうした非難の目に、毎日肩身狭い思いをした。／ ただ、母のはるは次郎の小説を読み、あたりまえのことを書いてあるのを発見して、三郎を励ました。／ 「次郎さんが天理教を批判したというけれど、あれは、あの人のお役目ですよ。学問をした人はちがうと、私は感心しましたね。信者さんの心をよく現わしています。その信者の心を悩ましたり、迷わしてはいけないと、忠告しているだけです。あれを読んで、怒る人があれば、胸にこたえたからですよ」(『人間の運命第二部第二巻嵐のまえ』P178.新潮社.1965)

水増しされた数で教会になり、金の問題で不満を生じる

天理教の教会組織のうち、最下位の宣教所をその部落に建設し、これを守って布教することを、神の道具となって……と難しく、おかねの夫は考えたのである。

そのことは二三十年前、兄がまだS町に出なかった頃試みたけれど、二度とも県庁から認可されなかった。

「てんびん棒の命」と世間から軽蔑せられても、信者達はかえって「世間並」を憐み、「お道の人」として自ら高く持し、信仰に燃えていたが、二回もおかみから挫かれると、兄の信仰についてS町に行ける者はなかった。後三十年祭、四十年祭の節に、兄は同じ宣教所設置の布教をしたが、皆情勢で信心を続けていても、海から離れて教職につこうとする者もなく、苦い二回の経験がいつも出足を渋らせた。それに、平の信徒でも重い経済的負担が、教会を持ったらどれ程きびしくなるか、婦達はいつも反対だった。

「神も勇めば人も勇む——」

兄も弟を励ます。神様を喜ばせるには、宣教所を設け、三十年前の信仰を部落に復興させるより他に方法がない。それこそ妻の病気を助ける道だと。手続きは、責任者ができれば、簡単である。二十戸の信徒は規定の百戸と記入され、形式的に条項は充たされて、風に吹き上げられた羽のごとく手軽に運ばれた。

信徒の救済よりも、教会制度の発展を宗教と心得ている本部が、その宣教所設置の請願を許可しないはずもなく、無償で国民思想の善導をなす教会を、近頃は、行政官庁が認可しない理由もない。余りに簡単に総てが終って、おかねの家を中心に僅かな信者も、やはり喜んだ。自分等の教会を持つことは、何ととっても、多年信仰する者の願いであろうが、おかみから認められたということは、長く特殊人扱いした村民に、見かえしのできる誇りである。神はあるのだ、神の言葉に偽りはなかった。皆興奮した。

宣教所も教会である限り、一定の敷地、建物が必要だ。まず金。しかし金の問題は燃え上った信仰には水のごとく、信者の間にブツブツ不平を起した。来る日も来る日も西風が荒れて、婦達は質草を探すようになり、それでなくても、漁師は憂鬱である。

おかねは、そんな外部の不平を、自分に向けられたもののごとく身を細めた。総てこの病から起ったことだ。他に助かる道はなかったろうか。他人に迷惑をかけず、夫と二人のまことで救っては戴けなかったろうか。住んでいる家も屋敷も神に捧げることにしたが、それだけでは足りなかったろうか。

風さえ吹けば、毎夜、信者の漁師を座敷に集め、兄の指導に従って、夫はお神楽の練習を始めた。鉄のように硬張った両掌に扇子を握り、調子の外れた歌を張上げて、直角のような足付きで、夫は踊る。常に櫓を持つ者には、扇子は重たげに、何度も落ち、脚は木製のごとく動かない。(「信者」 芹沢光治良、『完全版. 人間の運命18. 別巻2』P157. 勉誠出版. 2013)

老母は何回目かの愚痴を始めた。——Sが神様に全財産を投げ出した持、祖先に濟まないから、争って残させた家と屋敷を、今度次郎が全部捧げて了ったから、死んでも祭ってくれる所もない……

おかねには胸を刺す非難である。

「わしは今度も県庁で認可しないものと思って賛成したんだよ。二度も不認可にしたもんが、あの頃より信心もずっと不熱心になったのに認可するなんて、おかみもええかげんなもんだなあ」

いいかげんどころか、三造は吹き出しそうだった。 ××××××××××××××××、 ××××××××××××××××を阻もうと努力するが、天理教も神道として認められてから、進んでその役目を引受けている。それ故、三造の働く金属工場の仲間は、天理教を民衆の敵としている。救いは「谷底から」と信じて、無資産者の中に立ち、 ××××××××××××××××創生期に、素樸な信仰を得た母が、今も同じように、天理教を見ているのを、三造は泣き笑いしたかった。(P159)

—中略—

(P162) 「わたしが助かる為に、そんなにみんなに迷惑をかけるなんて——三ちゃんにも堪忍して貰わなくては」

「おたみちゃんのことなんか、どっちだっていいんですよ。僕アとっくに宗教なんて棄てちまったんだから、これでかえってサバサバしたのだし——」三造は工場での運動を少しも話さなかった。が帰ってから一度だって、神に掌を合わせなかった。母親が朝夕のお勤めだけはしてくれと頼んでも。

「神さんの御恩を忘れるなんて、罰当たりめ、今に理に迫るから。東京には電車や自動車が多いってのに、怪我でもしたらどうする」

母が勝手からでてきて加った。老母は三造が十四五の頃に盲になり、三十近くなった息子を、少年時代の印象に従ってか、今も子供としか扱わない。

「お母さんは、そうかと思うと兄さん達を貶したり、一体信心しろというのかね、しなっっていうのかね」

「信心は大切さ。ただ漁師は昔から漁師、漁師しながら信心しろっていうのさ」

「いいや兄さん達は賢いんですよ。神さんに良くサクシュされて、やっとそれでも、こちらもサクシュしてやろうって、気が付いたんだから」

「サクシュつてなにかね」それを説明しなかったから、お互に笑って夕食をとれた。(「信者」芹沢光治良.『完全版.人間の運命18.別巻2』P159. 勉誠出版. 2013)

《上と下で異なる信仰》

「姉がいおうとする信仰を、おたみは、今日まで見た上級階級の信仰生活と照してみると、信仰も上と下とでは異なるものかしら、と疑った」

「叱られると思ったって？」

おかねは妹の顔をつくづく仰いだ。その視線に腹まで刺されそうで、妹は羽織を合わせ、顔を伏せた。おたみは、分教会長の世話で、部下の支教会長の息子の所に、片付くことになって、別れに来たのだった。／ 「何も因縁だもの」

姉の言葉は、三造との約束を破ったことに向けられたのか、身体の秘密を感知していったのか、おたみは姉の顔に読もうとした。しかしその顔は、半年前よりも、蒼白く痔せて、鼻も高く目も澄み、清浄な感さえして、おたみはたじろいで目を外らせた。三造のことについて非難を受けたら、姉にだけは、匂わせて置こうと思うのに、姉は半句も触れようとしない。（おたみは偉い会長の子を宿しているかも知れない身体だった）／ 「病気は本当にいい？」妹はチグハグな気持ちから逃れたさに、再び挿んでみた。

「病気？」おかねは他人事のように、頓狂な目を答えて、「わたしは、病気のことなんかもう考えてもみないよ。日々結構に暮らせて頂いて、勿体ないと思うと、陽気になって……やっとなんか信仰というもんがのみ込めて来たんで、ありがたきことさ、三十年も信心していて、ぼこりを積み続けて来たのだから、この位は大難が小難というもんだらう」

妹は、黙り続けていた姉が、疲れているのかと気遣っていたのに、急に語り出したので、はらはらしながらも、襟を正して、蒲団の近くに寄った。姉は、しかし、蒲団に居住いを直して、力を寵めて続けた。

「わたしのよな因縁の深い者は、この位の病気をしないと、ほんとにお道の有難さが解らない。この病気から、こんなに教会もできたが、まだまだ、わたし達の心の普請ができないで、神様には勿体なくて。……わたしは、たんのうして、教祖様のご艱難の道を一步でも、踏まして貰いたい、なかなか山坂が多くて……」

殻を破って信仰に生れ変わるには、無知なおかねは、産みの苦しみにました努力を要した。おたみもそれに涙を誘われた。

「……だもの、病気なんか、よし良くならなくても有難い。何も彼も因縁だから。だけれど、おたみちゃん、あんたは立派な教会に嫁に行くんだが、よっぽどの決心をしないとイケない。信仰って大変なことだから、ちょっとやそつとではできない。八つのはこりの一つを払うだって、捨身になってかかんなくて……」

厳粛な一発であった。姉がいおうとする信仰を、おたみは、今日まで見た上級階級の信仰生活と照してみると、信仰も上と下とでは異なるものかしら、と疑ったが、何かしら胸に應えるものが、姉の言葉にはあった。

「神水をそんなにのんでいい？」妹は注意したが、おかねは、祭壇に長く置いた水には黴菌がいるからといった三造の言葉を思い出した。そんな目にも見えない虫がわくならば、その虫こそ胸の病菌を平げてくれよう、しかし、それを妹には告げる気にはならなかったが——（「信者」 芹沢光治良、『完全版. 人間の運命18. 別巻2』 P164. 勉誠出版. 2013）

年祭＝沈滞し勝ちな信徒の精神を鞭打とうとする教会制度の、信仰とは別の政策

大先生は神酒(おみき)にしては少し量を過されて真赤になり、詰め込んだ腹を、それでも端然と坐った膝にしっかりと載せ、十四五人の婦達を下にして、おもむろに話し出した—しかしその内容は婦達の予期を遥かに越えて、最初は呑み込み難かった。というのは、天理教教祖の五十年祭も近づいて信徒たる者は大決心を要する—と語るが、四十年祭を先達ってしたばかりではないでしょうか。婦達はその時の献金に借財した金の利子を、何回払ったか、ぼんやり数えて見る。

「——我が分教会は少なくとも百万円は作らねばなりません。昭和十一年と申しましても、直ぐに参りますから——」

婦達は説教を追えなくなった。百万円、彼女達には百万円はお伽噺の数字である。しかし信徒に頭割りすれば、実際数となって、各自にかかって来るが、果てのない海に綸を垂れて渡世する者が、その負担に堪えられるのだろうか、数に疎い婦達は、その巨大な数字に蒼くなった。が夫の留守を辞に、確答しないで済むことをほっとした。けれど、おかねはその桁外れの説教から、どんなおさとしが出るのか、不安で寝そべってもいられなくなった。

四

天理教では十年目を節という。節を境に社会も変化し、お道も拡まると。しかしそれは十年毎に一つの目標を押立てて、沈滞し勝ちな信徒の精神を鞭打とうとする教会制度の、信仰とは別の政策のようだ。三十年祭には大和に甘露台の大建築が、四十年祭には布教師の倍加が、そして五十年祭には全日本の人口を信者にしようということが、その目標。しかし心貧しい百姓や漁師の胸にある神殿は、その度に重なる経済的負担で壊れて行きはしななかるうか。(「信者」芹沢光治良、『完全版.人間の運命18.別巻2』P150.勉誠出版.2013)

天理教の組織と問題は昭和初期と変わらない！

天理教は、2026年に教祖140年祭を迎えます。昨年(2024)の12月には年祭活動の指針である「諭達第四号」が発表され、現在は、それを伝えるための「全教会一斉巡教」が行われています。しかし、芹沢光治良が昭和7年に書いた年祭の問題点は、何ら変わることなく、現在に引き継がれています。最近の年祭で変わったことといえば、目標がなくなってしまったことでしょうか。そして、「心貧しい百姓や漁師の胸にある神殿は、その度に重なる経済的負担で壊れていき、本部の巨大な神殿や数多い詰所、各地の教会の神殿は、祭典日以外はほとんど人のいない状態になっています。なぜこうなってしまったのでしょうか。

天理教と共に中山みきの教え、思想がこの世から消え去ることはあまりに悲しいことです。